

ヒンドゥー賛歌の「価値」に関する一考察

—南インドのバラモン階層との関係に着目して—

小尾 淳 (大東文化大学)

本発表では南インドのバラモン階層と音楽との親和性を歴史的根拠とし、ヒンドゥー賛歌が彼らにとっていかなる力をもってきたかを考察する。

インドのヒンドゥー社会では音楽と信仰が強く結びつき、時代・地域によって名称も形式も異なる多彩な賛歌が蓄積されてきた。発表者が調査地とする南インド、タミル・ナードゥ州では年間を通してヒンドゥー文化に根差した宗教音楽実践が見られ「神を称える」宗教歌謡が生活に息づいている。近代化以降「芸術」として成立した南インド古典音楽（カルナータカ音楽）の楽曲も、歌詞の側面から見れば広義の「賛歌」とみなすことができる。

したがって、古代より司祭階級として宗教的側面を担うバラモン階層が音楽と深く関わってきたことは自然の帰結であった。20世紀初頭には西洋教育を受けたバラモン・エリートが中心となる音楽振興機関が設立され、今日まで現地の音楽文化の普及と発展に貢献してきた。無論、複数の音楽コミュニティが相互関与しながらカルナータカ音楽の発展に貢献したことは疑いが無いが、実践家や研究者としてバラモン音楽家が圧倒的な存在感を放ってきたことは否めない。

タミル地方では20世紀初頭から隆盛した民族運動を背景に、タミル文化が再評価されると共に、長年にわたり鬱積した反バラモン感情が高まっていき、社会全体を巻き込んだ「非バラモン運動」に発展していった。音楽界でも、在地の主要言語であるにもかかわらず、タミル語の楽曲が歴代の支配者に冷遇され、サンスクリット、テルグ語の楽曲が優遇されてきたことに反発しタミル音楽の地位向上を目指す動きが活発になった。

本発表では非バラモン勢力が台頭し政治的・社会的権力を失った時代にバラモン・コミュニティが「ヒンドゥー伝統社会」の遺産ともいえる賛歌群を拠り所として「ヒンドゥー伝統文化の担い手」としての役割を担保したことを2つの事例から明示する。まとめとして、賛歌に生成した3つの価値を指摘する。